

ませんでした。病院に行けば自由がないのです。ですから、ライかん者は、湯の沢からはなれようとはしません。

ケサは、そのようなかん者の心がわかればわかるほど、「わたしは、やっぱりここへきてよかった。」と思うのでした。

ケサは、毎日、百人以上のかん者をみました。ライでない病人もきました。ところが、ライの人といっしょではないやといつて帰ってしまう人がいました。ケサは、それでは神の心にはずれると考え、午前中は湯の沢の人、午後はふつうの病人と分けてしんりようしました。

ケサは、どこへでもおうしんしました。かん者からは、若いが医者としてはうでもたしかだとたよりにされました。そのため、ケサは、たいへんいそがしくなりました。雪の日は、特に苦労しました。四キロ、五キロのところはあたりまえで、ときには十キロもはなれたところに、山かごにゆられて出かけました。ケサは、おうしんかばんやお産のきかいまで持って、千代子と治りようにつけま